

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 小林倫道気付
 (Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

「北の街にて」に見る学者の自己形成史

篠原 俊夫

仮に何十冊となく本を読んでも、しばらく傍において読み返して見たいと思う本は少ない。昨年読んだ本のうちで、久しぶりに感動したのが、阿部謹也著「北の街にて」（講談社 1965年刊）であった。いったん読み終えた後も何度も手にとって読み返している。

この本は阿部が西洋中世史家としてゆるぎない位置を占めるまでの自己の学問と思想の形成過程を述べたもので、一種のビルドゥングス・ロマンとして読むこともできる。

大学図書館員という立場から読んでみると、以下のような問題について考えるヒントを与えてくれるように思う。

1. 日本の大学の研究と教育の実態
 - ① 研究と教育の環境を保障する大学図書館の実態
 - ② 学問上の師弟の関係が研究者の生涯にもつ意味
 - ③ 若手研究者（大学院生）の学問のスタイルと問題意識の推移
 - ④ 教官人事の実態、待遇上の問題
2. ドイツの学問的土壌の特徴と図書館等の研究上の環境
 - ① ドイツにおける地方史研究の歴史と実態、及びその担い手、
 - ② ドイツの文書館、及び大学図書館のサービスと機能、水準など
3. 歴史を学ぶことの根本的な意味について

物語は阿部が青函連絡船で津軽海峡を渡り、「北の街」小樽の大学に赴任する場面からはじまる。

当時の阿部がおかれていた自己の研究上の立場は、専門とする分野に関してこれと言った成果を挙げるにいたらず、ドイツ騎士修道会を研究対象としながら小論文とやや大きな論文を数編書いただけで、それも決して満足のゆくものではなかった。師の上原専祿教授から「それをやらなければ生きてゆけないようなテーマを選べ」と言われ、中学生時代の修道院体験を原点として修道院研究を卒業論文のテーマにした阿部は、修士、博士の両課程を通じて鬱々として楽しみのない毎日を送る。自分の生き方に切実である課題が必ずしも学会のテーマに結びつかなかったからである。他の大学院生が学会をめざして論文の作成に励んでいるなかで、阿部は学究として生きる道筋を、周囲から孤立する自分を意識しながら懸命に模索していた。

小樽で研究者として生きるということは、何より新刊書が手に入れにくいとい

目次	「北の街にて」に見る学者の自己形成史 …… 1頁 大図研京都数珠京都数珠つなぎ（第3回） …… 4頁
----	---

う環境にあって、そのハンディを克服するためにどう工夫するかということでもあった。阿部は年に一度だけ東京に出かけていく機会に本をまとめ買いして、それを一年かけて読み、入手できない本はあえて読まないという方針をたてる。しかし、日本の書物の入手に苦勞する一方で、ドイツのゲッティンゲン図書館は、必要な書物のリストを送ると早ければ三週間でその本のコピーを送ってくれた。阿部は入手が難しい日本の書物より、入手しやすいドイツの書物を読むことに決めたのである。

4年ほどで日本で入手可能なドイツのオステローデ地域関係の資料を読み尽くし、それまで確信を持つことができなかつたドイツ史を学ぶことの意義、中世史研究の視点がどこにあるかなどの根本的な問題についても決着をつけることができたと感じた阿部は、留学を決意し、1968年にフンボルト財団の奨学生に応募し、採用される。

ドイツでは、まずイザローンのゲーテ・インスティテュートでドイツ語の訓練を2カ月間受けた後、ボン大学に旧知のフーバツチュ教授を訪ねる。阿部はオストプロイセンのオストローデの地域史をやりたいというが教授は外国人がドイツ中世の地域史などやれるわけがないから、別のテーマを選ぶようすすめる。しかし、このテーマのために何年も準備してきたのだから、今更変更することはできないと強く言い張る阿部に、教授は態度を変え、一緒にゲッティンゲンにいかなければならないという。

ゲッティンゲンで文書館に教授とこもった三日間の絶望感は言葉につくせないほどであった。まったく古文書が読めない。日本でパレオグラフィー（古文書学）を学んではいたが実際の筆跡にあたると読めないのである。絶望感のみの三日間をすごした後、ボンに帰り4カ月の間、死にものぐるいでパレオグラフィーに取り組んだが成果があがったように見えなかった。その時の絶望感が消えたのは半年後のことだったと阿部は記している。

その後の阿部は、ボン大学の歴史学教室に毎日通い、プロイセンに関する論文を読み、ノートを取る生活に明け暮れた。日本では手にはいらぬ文献がいくつでもあった。

阿部はここでロタル・ヴェーバーというプロイセンの地主が1878年に書いた「五百年前のプロイセン」という興味深い書物を発見する。この書物は他の学者には不可能なほど史料に沈潜し、プロイセンの歴史を実証的に描きあげているという。しかも、ヴェーバーの使用した史料は、当時のままにゲッティンゲンの文書館に残されているという。

阿部は1970年の4月から、ゲッティンゲンの静かな住宅街に家を見つけて、家族とともに暮らし、毎朝近くの文書館に出かけ、昼まで仕事をして、昼食をとり家に帰り、2時からはゲッティンゲン大学の付属図書館に行って書物を読むという生活をはじめた。

古文書が思うように読めず、とりわけ固有名詞の判読に苦勞する生活は一年近く続いたが、ある日気が付いてみると文書が十数枚積んであり、いつの間にか読めるようになっていたことに気が付くような経験もした。

文書館で東プロイセンのオストローデ地区に関係する古文書をひたすら読みすすむうちに、ハーメルンの笛吹き男に関する文書を発見する。ハーメルンの笛吹き男は単なる物語ではなく、歴史的真相であったという驚き。以来、阿部は午前中は文書館でそれまで通りの仕事を続け、午後はゲッティンゲン大学の図書館でこの伝説をめぐるかなりの文献を入手した。また、この伝説に関する研究をすすめる過程でドイツの地域史研究のすばらしさを知る。なぜなら、このハーメルンの伝説にかかわる研究をすすめたのはほとんどすべて在野の地域史研究者であり、大学教授などはほとんどいなかったのである。

かくて阿部はドイツの地域史研究団体に関心をもつようになり、十八、九世紀に各地に形成されつつあったいわゆる歴史教会について調べはじめる。

ゲッティンゲン大学の図書館に通ううちにマックス・プランク歴史研究所のヘルマン・ハインベル教授と親交を結ぶようになる。ある日、ハインベル教授に誘われて、街の有名

なカフェでコーヒーを飲んだ折りのこと、突然教授から「貴方の弟子の中で帝国議会文書の編集をやる人はいませんか」と尋ねられる。帝国議会文書とは中世の帝国議会の一級史料のことであり、この史料の編集こそ歴史家の最も重要な仕事であり、それができるといふことは歴史家としての大きな資格となるものである。そのような仕事をなぜ日本人にまかせるというのだろうか。はじめ冗談話と思って聞いているうち、容易ならぬ事態だと分かってくる。若い人は労多くして利のすくない仕事を希望しなくなったというのである。

だから勤勉で辛抱強い日本人にまかせたいというのが教授の真意だったのである。阿部は複雑な気持ちを抱きつつも、帰国してから何人かの人にあたってみるがうまくいかなかった。事情は日本でも同じことで、大学院に在席する間にいくつかの論文を書けば日本の大学に就職できる。十数年もドイツに滞在して議会文書の編集に時間をさく余裕はないということなのである。歴史研究のあり方が変わってきたのである。ドイツも日本も事態はおなじことだった。結果が早くでて、見栄えのいい研究課題でなければやる人はいないのである。

ここまで、阿部の小樽商科大学時代の学究生活とドイツでの研鑽を要約してみたのだがきわめて大雑把なものでしかない。言えることは、阿部がこれまで関わってきた主たる研究上のテーマがいかに発見され学問的業績として結実していったかということが率直に述べられているということである。

「ゲッティンゲンという町はその点ではすばらしいところで、調べたいと思うことがあれば大学図書館にゆきさえすればよいのである。たちどころに必要な書物が揃うし、もしその書物がなければニーダー・ザクセンの各地の大学その他の図書館から取り寄せてくれる。この点だけでも当時の日本の大学はとうていドイツ否ヨーロッパの大学に遠く及ばないと思ったのである。」

研究者として、日本とドイツの大学図書館にどっぷりと身を浸した経験をもつ阿部が彼我の図書館を比較して、端的に評価を下したものである。

阿部の言葉をもって優秀なドイツの大学図書館と遅れた日本の大学図書館という安易な結論に結びつけないわけではない。私自身が日本の大学図書館に身をおきながら、そんな気楽な他人事のようなことが言えるわけがない。しかし、いつになったらそれができののかという思いと日本の大学図書館に、そんな日が訪れることはないかも知れないという思いが交錯するのも事実である。

(しのはら・としお/京都大学法学部図書館)

〇〇〇

(図次ページより)

しかし、委員長の口から出たのは……なんと、計画の白紙撤回だった。図書室の現状維持が教室会議で認められたという話だった。そのときは一瞬耳を疑った。つぎに、じわつと嬉しさがこみ上げてきた。ついにやった。私たちの主張が認められたんだ。3人で一緒になって頑張って教室を動かしたんだ。素晴らしい。私たちが捨てたものではないな。そして、この教室も。

さて、つぎは宇治・化学研究所図書室の松延秀一さんを紹介します。図書館部会で知り合ったとても優秀でまじめな方です。では松延さんよろしくお願いします。

「数珠つなぎ」のルール

- ①内容は硬軟自由。②原稿量も1ページ程度以上で自由。③執筆者には次回執筆者を指名する義務があります。④指名された人はもちろん拒否権なし。

| 衝撃の新コーナー!!

● 大図研京都数珠つなぎ 第3回

京都大学工学部
建築系教室図書室なかむらせつこ
中村節子 さん

大学改革の落とし穴

— 建築系図書室縮小計画の顛末 —

3 月初めの月曜日、それは突然図書室を襲った。教室内計画委員長と図書委員長が揃って来室し、私たち図書室職員3人に話があるので集まるようにと言った。

『教室会議で決まったことだが、図書閲覧室+図書事務室として使っているスペースのうち1スパン分をこれからゼミ室に使いたいので提出してほしい。この4月からの改組で研究室が増えるため、あと6つ部屋が要る。教室のどこも応分の負担を強いられていて、図書室も例外ではない。』

何かあるとは思ったが、図書室を縮小する計画とは。まさに青天のへきれきで、とっさに言葉も出なかった。言われたスペースは現在の図書事務室の約半分にあたる。これ以上事務スペースは減らせない。そうかと言って、閲覧スペースの縮小は利用者に不便をかける。削りたくない。何とかならないのか必死の思いで尋ねてみた。すると『決定事項ではあるが、教室会議を納得させるだけの主張ができれば覆すことはできるだろう。しかし、確率は大変低いと思う。』との返事だった。そこで、図書室で資料を作り、会議前までに計画委員長宛届けることにした。会議は4日後だった。

3人で話した。図書室のことを先生方は何と考えているのだろうか。学生さん達が不便になることは平気なんだろうか。秘書を使い、自分で図書室に来ることもない教授たちに閲覧室の必要性を説いても無駄なんだろうか。それに決め方も納得がいかない。学生委員も含めた図書委員会という組織が教室にあるのに、教室会議で決めてしまうなんて。しかも図書室をあずかる図書職員に何の相談もなく。家に帰ってから、私は考えれば考えるほどくやしくて情けなくて思わず涙があふれてきた。

翌朝、3人が同時に口を開いた。みな家で考えていたのだろうか。何とか私たちがやれるだけやってみよう。学生図書委員にも声をかけよう。無駄かも知れないけど、このままでは納得がいかないから。と。さらに3人で話し合った。このままでは働く意欲も失ってしまう。ダメもとで教室会議に挑戦してみようということになった。その後は、それぞれ資料作成を分担した。過去数年の利用統計をまとめる人、文章を書く人、現況図と予想図を描く人、それぞれが必死だった。会議の1時間半前に資料がやっと完成した。先に約束していた計画委員長に資料を持参した。委員長に内容を説明した後、委員長は、この資料を見せてもらって、図書室の縮小は無理な気がしてきたと言い、教室会議を通すために、資料の中で手直した方がよい箇所をいくつかアドバイスしてくれた。

しかし、その時点で私たちに残された時間は1時間を切っていた。それからは戦争だった。図の手直しに時間がかかるうえ、延べ10枚ほどにもなる資料を40部作って会議室まで届けなくてはならなかった。コピーを取りに高速機のある事務室へ何度も走って往復したり、大変だった。一方、計画委員長は、図書室の現状をもう一度目で確認したいと言って来室した。また、図書委員長も打ち合せのため電話をかけてきた。

資料をやっと会議室に届け終わった後、3人で話した。ここ数日、こんなに苦労したけどたぶんダメやろうね。今日ほどつと疲れて帰ることになりそうやね。それにしても忙しかった。お互いお疲れさま。でも一応頑張ってよかったと思う。

午後4時半頃、図書委員長が来室した。覚悟はあったが、なんだか聞くのが恐かった。

(冒前ページへ)